
ヘタリア好きの4人の物語

凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタリア好きの4人の物語

【Nコード】

N9836Y

【作者名】

凜

【あらすじ】

いつもの様に4人で学校から帰っていると、知らない男達の車に乗せられてしまった。男達は「ある人に連れて来てくれと頼まれた。」というが、そのある人とは

女体化した日本だった！？しかも日本に「あなた達に助けてもらいたいことがある」とか「あなた達4人は私達『国』以上の存在」と言われた。

一体【助けてもらいたい事】とは何なのか。

そして【4人が『国』以上の存在】とは一体どういうことなのか。

あらすじ変更しました。

♪ 設定 ♪ (前書き)

初めまして、凜です。たぶんぐだぐだになってしまいますがそれで
も良いという

お優しい方はお読みください。

♪ 設定 ♪

主人公の設定です。ヘタリアのキャラは皆そのままですが、女体化してるキャラもいるのでご注意ください。

立花詩音 たちばなしおん

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は腰辺りまである。いつもポニーテールにしている。
- ・ 性格は元気、寂しがり屋。
- ・ 二次元大好き。今一番はまっているアニメは「ヘタリア」

斉藤彩 さいとうあや

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩に掛かるくらい。
- ・ 性格は元気で優しい。面倒見がいい。
- ・ 二次元大好き。4人の中で最初に「ヘタリア」にはまった。今でも大好き。

桜本香澄 さくらもとかすみ

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩にかかるかからないくらいの長さ。
- ・ 性格は大人しいが、怒らせると怖い。
- ・ 二次元大好き。詩音や彩にすすめられて「ヘタリア」を見たらはまった。

皆藤すみれ かいどう

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩にかかるくらい。
- ・ 性格は子供っぽい。かわいいもの大好き。

・二次元はまあまあ好き。 彩と詩音にすすめられて「ヘタリア」
を見てはまった。

♪ 設定 ♪ (後書き)

こんな感じの主人公設定です。次からは本編を書いていきますので
よろしく願います!!

主人公となぞの男達（前書き）

今回の話は11月のテスト期間最終日のお話です。
私もこの前テストがありました。遊んではっかりで
勉強をしていなかったんで点数ひどいの多かったですw
w
とりあえず本編です！

主人公となぞの男達

―教室―

詩音「やつとテスト期間終わった！ねえ！今からどっかに遊びに行かない？」

彩「え…今から？」

詩「何か用事でもあるの？」

彩「別に？今日は疲れたから帰って寝たいだけー。」

詩「確かにあたしも疲れた…。じゃあ今日は遊びに行かないで明日いこ！」

明日なら休みの日だし、いいでしょ？」

彩「んー、分かった。明日ならいいよ。」

「何の話してたの？」

「あたし達もまぜて♪」

声の聞こえた方に顔を向けると、仲良しの香澄とすみれがいた。

詩「あ、香澄とすみれ！丁度良かった！

明日暇？今彩と明日遊ぼって話してたんだけど、暇なら遊ぼうよ！」

香澄「明日…？用事多分無かったから大丈夫だと思う。」

すみれ「あたしも用事無いよー♪」

彩「とりあえず、教室から出て歩きながら喋らない？」

詩「そうだね、じゃあとりあえず行こっか。」

彩の提案で4人は教室から出て、喋りながら歩く。

4人は家も近く、クラスも一緒なので毎日一緒に登下校をする。

今日もいつもの道を、4人で歩いて帰る・・・筈だった。

一台の車が4人のいる所に向かって走ってきて、止まった。

そして車内から一人の黒い服でサングラスをかけた男が出てきて、詩音たちに話しかけた。

なぞの男1「あの、失礼ですが、立花詩音さん、斉藤彩さん、

桜本香澄さん、皆藤すみれさんですね？」

詩「は、はい…そうですね。どなたですか？」

男2「私達はある方にあなた達を迎えに行ってくれと頼まれた者です。」

彩「…ある方って？」

男1「…あなた達がよく知っている方だと思います。」

とにかく車に乗ってください。私は車であなた達を言われた場所に

お送りするだけです。」

すみ「とりあえず、乗ろう？この人悪い人には見えないし、

それによく知っている人って言うてたし。誰か気にならない？」

すみれが行くなら、と他の3人も行くことになり、4人は車（7人乗りの）に乗りこむ。

主人公となぞの男達（後書き）

おかしいトコ多すぎですよね…私全然才能無い…

最後まで見てくださった方ありがとうございます！

もしよかったら感想やリクエストしてくださるとうれしいです！

車の中で（前書き）

感想やお気に入り登録などありがとうございます！

これからもよろしく願います！

昨日投稿しようと思っていたんですが家の兄がPCをずっと使っていて

できませんでした。

この前投稿したやつ、ヘタリアのことまったく出てきませんでしたね。

ヘタリアの小説なのに。とりあえずくだぐだですがお読みください！

車の中で

ー車の中ー

詩「あの、私達どこへ向かっているんですか？

もう随分遠くまで来ましたよね。」

男1「どこへ向かっているかは着いたら分かりますよ。

車で移動して20分くらいですからあと10分程で着きます。」

彩「あと10分かゝ・・・しりとりでもする？」

すみ「いいんじゃない？けど普通のしりとりじゃなくて

アニメしりとりで！」

アニメしりとりとはアニメに関する事だけでしりとりするやつです。ただし、机とか鉛筆など絶対どこにでもあるようなものはダメ。というものです。

香「アニメしりとりかあ…いいよ、やろう！」

詩「あたしもやる！ルールはいつも通り、声優さんやキャラの名前有りでいいよね？」

彩・香・すみ「OK！」

すみ「じゃああたしからね…「り」からだから…「リトニア」！」

詩「さつそくヘタキャラで来たか…じゃあ「アイスランド」！」

彩「「ドイツ」」

香「みんなヘタキャラだね、えっと…「ツェペリナイ」…リトニアの料理」

すみ「「イギリス」！」

詩「「スイス」」

彩「みんなヘタリアのじゃん…」

そんな感じでしりとりをしていると、詩音達の乗っている車が、ある建物の前で止まった。

ある建物とはこの辺ではとても大きなホテルだ。詩音達は車から降りた。

男1「着きました。ここです。私達はこれで役目を果たしたので帰ります。」

男2「詩音さん達は201号室へ行って下さい。そこにあなた達がよく知っている方がいるはずです。」

詩「…分かりました。ここまで連れてきてくれてありがとうございます。」

と言ってお辞儀をした。続いて彩達もお辞儀をした。

男達もお辞儀をして、車にもどり、どこかに帰って行った。

詩「…じゃあ行こっか。誰かわからない人のもとへ。」

詩音達はホテルの中に入って、係員に案内してもらい201号室にいった。

―ホテル・201号室前―

詩「…じゃあ…開けるよ?」

詩音の言葉にみんなが頷くと、詩音は201号室の扉を開いた。

車の中で（後書き）

とりあえず扉開ける所で終わらせましたが、どうだったでしょうか？
感想をよかったらお願いします！変だったら変だっではっきり言って
下さって結構ですのでww！

あと、ヘタキャラの女体化リクエスト募集中です！

部屋に居たのは（前書き）

とりあえず、今回は前回の最後の所から始まります。
感謝くれた人、ありがとうございました！
今回はあの2人が登場します！ではお読みください！

詩「さつきは取り乱してすいませんでした。あの…本物…ですよね？」

日「はい、本物です。」

彩「けど、日本さんってマンガ…の二次元の中の人です…よね？」

日「え?! 私が二次元の中の人?! 本当ですかそれ！」

彩「そうです! そうですから! とりあえず私のこと揺らすのやめてください!」

日「ハッ…す、すいません。つい取り乱してしまつて…」

すみ「で? なぜ私達がその二次元の中の人に呼ばれてんですか？」

日「そうですね。少し説明しましょうか。あなた達が私に呼ばれた理由を。」

— (説明省略) 説明後 —

日「という事なんですが、お分かりになりましたか？」

詩「えと、つまり…」

日「今、私達『国』が大変なことになっているので、

あなた達に助けてもらいたいのです。」

彩「…何であたし達? 他にもたくさんいるなかで？」

日「それはあなた達しか私達のいる場所にたどり着けないからです。

先ほど、私が二次元の中の人と仰られたのは、おそらくその世界が

丁度二次元のところにあつたのでしよう。」

香「私達だけしか行けない? それってどういうことですか？」

日「あなた達は私達『国』と同じくらい…いえ、それ以上の存在なのです。」

すみ「あたし達が日本さんたち以上の存在? それってどういう事ですか？」

日「それは私の口からは申し上げられません。いずれご自分でお気付きになる

と思います。あなた達が何者なのか。」

詩「私達が何者か…?」

日「そろそろ良いでしょうか?先ほどの答え…」

【私達『国』のいる世界に一緒に来て頂けるのか。】「

彩「あの…日本さん。一ついいですか?」

日「はい、なんでしょう?」

彩「両親とか友達ともうその世界に行ったら二度と会えないんですか?」

日「そうですね…あちらの世界には行けないのですからそうなるでしょう。」

ですが時々こちらの世界に戻って頂けるとは思いますので大丈夫です。

二度と会えなくなるというのはおそらく無いでしょうね。」

彩「そうですか…。」

詩「…こっちの世界に帰られるんだったら行ってもいいかなあ…。」

香「詩音…?」

詩「だってヘタキャラの本物会えるんだよ?

しかもあたし達しかその世界に行けないのなら私達が断ったら

日本さん達が困ったままだよ?」

香「…そうだね。あたしも行く。日本さん達を助きたい!」

すみ「あたしも行く!」

彩「…皆が行くならあたしも行く!」

日本は私達の答えを聞いて微笑んだ。

日「では、あなた達には私達『国』のいる世界で暮らしてもらいます。」

それでは行きましょうか。」

詩「行くなってどこへ?」

日「もちろん私達のいる世界ですよ。この場所から行けますので。」

それでは…イギリスさん？もう出てきていいですよ。」

日本がそう言うところには隠れていたのかイギリスが出てきた。
しかも女体化の。

イギリス「んじゃ、行くか。」

詩「ちよつと待って！？何でイギリスいるの？どつから今出てきたの？

てか日本さんに会ったときから思ってたけどなんで2人とも女体化？」

英「質問多いなあ前…そういうのは後で話すから今は移動すんぞ。」

詩「……はい……」

詩音が頷いた後、イギリスは大きな魔法陣みたいなものを床に書いていた。

それは10分ほどで書き終わった。

英「よし、じゃあこの魔法陣の中に入ってくれ。」

イギリスに言われたとおりに私達（詩・彩・すみ・香）は魔法陣の中に入った。

詩音たちが入った後に日本、イギリスも魔法陣の中に入った。

英「じゃあ、行くか。俺達のいる世界へ。」

詩・彩・すみ・香「……はい。」「」「」

部屋に居たのは（後書き）

日「ようやく私達が出てきましたね。」

英「そうだな。」

日「それにしても私達が二次元の人なんて嬉しいです。」

英「ああ、日本はオタクだもんな。」

日「とりあえずあの子達とは仲良くなれそうですね。ふふふ…」

英「日本、お前なんか怖いぞ？」

日「イギリスさんもアニメやマンガをもっと好きになれば良いのです。」

私が面白さを徹底的にお教えしましょう…」

イギリスがこの後どうなったかは

皆さんの想像にお任せします

感想などよかつたらお願いします！

ヘタリアの世界へ (前書き)

今回はやっとヘタリアの世界に行きます。
gggdですがお読みください！

ヘタリアの世界へ

詩音達が返事をした後、イギリスは呪文を唱えた。
すると、魔法陣が一瞬光った。詩音達は眩しくて目を瞑った。

英「着いたぞ。目を開けて見てみる。」

詩「え？もう着いたの？」

イギリスの言うとおり目を開けてみると、
目の前にはとても大きな洋風の建物があった。

彩「でか過ぎ！お城みたい！」

日「そうですね。日本にはここまで大きな建物はありませんから
そう思うでしょう。」

とりあえず、中に入りましょう。皆さんお待ちになっているでし
ようから。」

英「そうだな、とりあえず中に入るぞ。後でゆっくり見ていいから。」

イギリス達にそう言われてももう少し見ていたかったが、
詩音達はその建物の中に入った。

中はとても広く、ドラマとかでしか見られないような豪華なシャン
デリアなどがあった。

香「すごいなあ…ヘタリアのキャラに会えて、

しかもこんなお城みたいな所に来てるなんて夢みたい…」

すみ「そうだよなあ…何かすごい夢みたいだよね…」

日「ふふ…夢ではありませんよ。現実です。」

さあ、行きましょうか。」

日本達に付いて行くと、ひとつの扉の前で日本とイギリスが立ち止まった。

英「ここで少し待ってる。ちょっと俺らはすることがあるから。すぐ戻る。」

そついうと、日本とイギリスは部屋の中に入っていった。

詩「日本とイギリスの女体化した姿慣れない…

声も少し女の子の声みたいで違うし。」

彩「そうだよな。けど、口調はそのままなんだよね。」

香「何でだろうね？」

すみ「さあ？後で聞けばいいんじゃない？」

そんな話をしていると、イギリスと日本が部屋から出てきた。

日「お待たせしました。では中に入りましょうか。」

日本はそう言つて扉を開けた。扉の向こうはなんと…

詩「何ここ…楽園じゃん!!」

英「そんな事言つてないで入って来い。」

イギリスの言うとおり部屋の中に入る。

扉の向こうはヘタリアのキャラがたくさんいた。しかもほとんどが女体化していた。

日「この子達が例の子達です。」

詩音さん、彩さん、香澄さん、すみれさん。

自己紹介をしていただけですか？」

日本にそういわれ、私達4人は自己紹介をした。

？「ヴェー君達かわいいねー！今度パスター一緒に食べよう？」

？「イタリア！今は女なんだからナンパするな！」

詩「イタちゃんもドイツも女の子だあ！かわいい！」

イタリア「ヴェー？俺達のこと知ってるの？」

日「ああ、それはですね。私たちはあちらの世界では漫画のキャラだそうです。」

伊「そっかあ、だから知ってたんだね！」

彩「ねえ、今さっき「今は女なんだから」って言ってたけど、どういうこと？」

日「そうですね、そろそろ説明いたしましょうか。この世界に何があつたのか。」

この世界で何があつたのか、それがついに詩音たちに明かされる…

ヘタリアの世界へ（後書き）

次は詩音達にヘタリアの世界で何があったのか
明かされます。

次の話はどうなるんでしょうね？（↑考えてない）
とりあえず、次もお願いします！

この世界に起こったこと（前書き）

今日学力テストでした。社会でアメリカの独立戦争の問題とか出て一人でテンションあがってました。

この前誰が居るのか書き忘れたんでここに書きます。

枢軸・連合国・ローマーノ・プロイセン・オーストリアが室内にいます。

今回はホントにぐだぐだです。それでもおk!という方はよろしく願います。

この世界に起こったこと

日「そうですね。そろそろ説明しましょうか。この世界に何があったのか。」

すみ「この世界で何が起こったのか……？」

日「はい。先程、あなた達が疑問に思ったことを言ってみてください。」

彩「えと、女体化している人がいること？」

日「ええ。そうです。実は私や他の女体化しているとされた皆さんも女性ではなく、

元々は男性なんです。」

詩「え？どういうこと？」

英「なんか知らねえけど、先月の朝起きたら女の体になっちまってたんだよ。」

香「え？朝起きたら？」

彩「イギリス、自分でやったんじゃないの？ほあたで。」

英「ちげえよ！俺じゃねえよ！」

日「ええ、イギリスさんではありません。私や皆さんも最初はそう思ってたんですが

イギリスさんにお聞きしたら違うとすぐ否定されましたので……」

彩「あたしはイギリスがお酒に酔って皆に魔法をかけたのかなって思ってたんだけど。」

詩「あ、それあたしも思った！」

すみ「あたしも。イギリスならやりかねないなって思ってた。」

香「私も少し思ってた……」

英「お前等それひどくね？まあ……絶対やらねえ！……とは言い切れ無くもない、な。」

彩「ほら！やっぱりイギリスがやったんじゃないの？」

英「だからちげえよ！てか最近俺は酒飲んでねえよ！」

詩「ホントに？嘘じゃないよね？」

英「何で嘘つかなきゃなんねえんだよ！」

イギリス・日本・詩音・彩・すみれ・香澄の6人で話しているとさっきまでドイツに怒られていたイタリアが話しかけてきた。

伊「ねえ！そっちだけで話さないで皆で話そうよ」

日「イタリア君の言うとおりですね。皆さんで椅子に座りながらいろいろとお話をしましょう。おそらく結構時間がかかってしまうでしょうし。」

英「…そうだな。おい、お前らこっち来い。」

イギリスについてくと、イタリアと日本の間に4人で座った。

詩「（…しかし、改めて見るとすごいな。この女体化…）」

詩音はそう思いながら周りの人…ならぬヘタキャラを見ていた。ここにいる中で女体化しているキャラは枢軸の日本・イタリア・ドイツ。

そして連合国のイギリス・フランス・カナダ。他には南イタリアであるロマーノや

オーストリア・プロイセン。ほとんどが女体化している。

詩「（いくらなんでも女体化しすぎでしょこれは！！）」

彩「……女体化しすぎじゃん？」

どうやら彩も詩音と同じ事を思っていたようだ。

…実際多いしねw w

日「……それでは先程のお話の続きをいたしましょう。」

先程はイギリスさんがやったんじゃないのか？という話をされていたんですね？」

詩「うん。そうだね。」

日「でも、それはありえない事だと分かっていただけでしたか？」

彩「まあ。あんなに否定されれば嘘じゃないって分かるしね」

日「それでは、どうして私達は女体化してしまったんでしょう？」

香「…ほかに原因があるってこと？」

英「ああ。だが、その原因が全く分からねえんだ。」

すみ「原因が…分からない？」

独「そうだ。世界中がその原因を調べているんだが

全く誰にも分からないんだ。」

詩「……それで？あたし達がここに呼ばれたのって

何をするため？」

日「…実は、一つだけこの前分かったことがあります。」

彩「それってなに？」

伊「この世界に原因があるんじゃないやなくて違う世界に原因があるって

ことだよ」

すみ「違う世界…もしかしてあたし達の世界のこと？」

中国「そうある。」

詩「あ。にーにだ！」

中「にー、に？今にーと言ったあるか？！

この子かわいいあるー！！」

中国は詩音に思いっきり抱きついた。

日「ちょ。ちょっと！中国さん！詩音さんから離れてください！」

中「日本も我のことにーにとよぶある！」

詩「と、とりあえず離れてください！苦しいです…」

詩音がそういうと、中国は離れていった。

詩「ビツクリした……それで？」

あたし達の世界が原因だからあたし達に解決してほしいとか？」

彩「てか、なんであたし達はここに來れたの？普通の中学生だよ？」

日「…ここに來る前に言いましたよね？あなた達は私たち『国』よりも

特別な存在だと。」

香「そういえば…」

日「…たぶんですが、この世界で生活していると、

嫌でも思い出します。」

すみ「この世界に居たら…か。もしかしてあたし達はこの世界の人間
だとか？」

英「…さあな。まだ俺達にも本当かどうかは分からねえことが多い
んだ。

本当にそうかも知れねえけどな。さっきの話だが、その原因って
いうのは…

お前らだよ。」

詩・彩・すみ・香「あたしたち………？」

この世界に起こったこと (後書き)

なんか意味不明ですねーww
ここまで読んでくれた方ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9836y/>

ヘタリア好きの4人の物語

2011年12月8日18時05分発行